



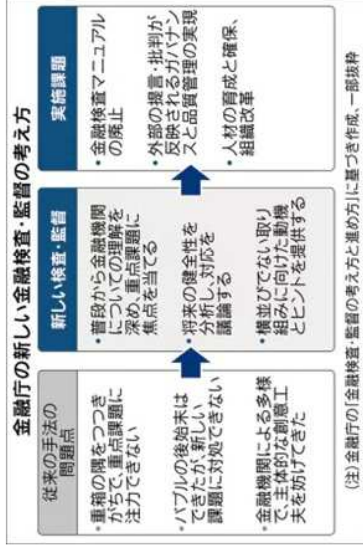
MEI通信

2019年 第14号

発行者: (株)メタモルフオー

変わる企業評価

～融資審査で重要となる視点とは～



2018年4月23日 日経スタイルカリスマの直言より

これまでは検査マニュアルに基づいて企業は評価されていましたが、それが廃止になります。経営者は銀行が何を評価項目とするかを意識しておく必要があります。

これが廃止される意図はどこにあるのか、また今後、企業が融資を受ける際に代わって来るのはどんなことなのか、弊社財務コンサルタントで株式会社ライズ代表、渋谷和比古氏に聞きました。

検査マニュアルでは、厳格な基準に基づいて融資先を「正常先」「要注意先」「要管理先」「破綻懸念先」「実質破綻先」の区分に分類し、その融資が担保や保証でカバーされていない限り、原則として「要管理先」「破綻懸念先」「実質破綻先」については開示債権(不良債権)にすることを求めています。

99年から運用されてきた金融機関の経営を細かく点検する際の手引書、「検査マニュアル」が今年度を目途に廃止されます。パプル廃止後に多くの銀行が多額の不良債権を抱えたことを受け、貸出資産やリスクを厳しくチェックするために導入されました。不良債権処理に役立った一方、銀行に「検査マニュアル」に従えばいいという思考停止を生んだ弊害もあったといえます。

18年度末 検査マニュアル廃止へ



これまでは融資判断の際、決算書の内容に重きを置かれてきましたがこれからは銀行側が本当に融資したい企業なのかどうか、事業を見て決めていくこととなります。具体的には、事業の中身、社長の人間性やビジョン、内部の統制や従業員の取り組が、社内環境の整備など様々な視点から今後伸びていく企業かどうかで評価されるのです。

可能性のある企業を伸ばしていくことは、日本社会のために必要なことです。現状数字が悪くてもベンチャー企業など、今後大きく飛躍していく会社もあるでしょう。数字だけを見て「融資しない」と判断することは、日本社会の成長を止めることでもあるのです。そのため、そういった企業にも積極的に融資ができるように、評価方法が見直されることになったのです。

組織の内部へ目を向けることは、売上へ即時効果が期待できるものではありません。しかし、長い目で見て企業の成長に欠かせないことであり、今後は融資の面でも評価されるといいうことも含めて、経営者として取り組んでいくべき部分なのです。

※参考記事

- ・日本経済新聞 17年12月15日
- ・「検査マニュアル18年度末に廃止 金融庁」
- ・日経スタイルカリスマの直言 18年4月23日
- ・「地域金融 活性化に欠くリスクを取る発想」ニッセイエンキャピタル会長

組織づくりで大事にしたい3つの視点 コンサルタント 浦元献吾



『メタモルフオーメールレター』より、精密機器製造業で35年間、人事・労務に従事していた経験を持つ、弊社コンサルタント浦元献吾の担当記事を一部抜粋してご紹介します。

- 組織づくりでは
- 現場を大事にする
- 雑談を大事にする
- 気づきを大事にする

この3つの視点が非常に重要であると私は考えられています。今日はその中でも現場を大事にするについて、詳しくお伝えしたいと思います。

経営理念や行動指針など、社長の思い、ビジョンを言語化し、社員を共有することは組織を作っていく上で非常に重要なことです。しかし、どんなに立派な経営理念と行動指針を掲げ、細かく作りあげた立派な人事制度も、それだけでは絵に描いた餅になってしまいます。

それらは、そこに魂が入って初めて成り立つものであるのです。さて、それでは「魂」とは何でしょう。『現場で働く人たちが何を感しながら働いているのか』これを経営者やリーダー層が、いかに把握しているかということに尽きると感じています。

全文はバックナンバーからお楽しみいただけます。登録はQRコードからお願いいたします。

『メタモルフオー』
無料メールレター
『自律型組織を目指す
全ての人の』

